こども時代

久米又三

○

思い出を通して見るこども心は、放心に近いものの中に、いたって鮮明ないくつかの画像が漂っているかのようである。画像と画像のつながりは必らずしも明らかではないが、一つ一つの画像は、生涯を通じて心のどこかに定着していて、おのおのが意味をおびていて、そのあるものは、生涯の方向決定にあたって重要な役割をはたしているようである。画像のなかには、「地にはおだやか」ということばそのままなおだやかな境地と、それとは反対な「おびえ」と、人に対する無条件な信頼や尊敬と、それと同時に、すきまみるような警戒。その後の長い生涯の間にすら経験することがなかったかと感ぜられるような、純粋な喜びや誇り、そしてそれとは反対な悲しみや侮辱。誰に教えられ求められたものと覚えのないままに、案外に厳しい自己修錬の日々が続く。

「案外に厳しい自己修錬の日々」などというと、いかにもこどもらしくない表現ではあるが、しかし、それに棒げられた時間とエネルギーは非常なものである。そして、それに捧げられた時間とエネルギーによる経験は、身体的な記憶となって続くものとみえて、私のように業として実験科学を選んだ者にとっては、生涯のある時に、その記憶の甦えりが意外な意味をおびて作用する。作業はいたって単純であるが極めて集中的である。地上に引いた線で、確実に三輪車を停止さすための日課のような反覆訓練。ガラス窓に水でぬらしたガラス板をはりつけて、その間にできた気胞の移動を丹念に制御する練習は、気胞の形の際限のない美しい変化とともに、私の心を魅するに十分であった。

別に時間の制限を受けたわけでもなく、時の流れを意識したこともなく、しかも、作業についての自己批判は厳しく、正直にその成否を判定しながらひねもす繰り返したあの集中感は、極めて深かったものにちがいない。後になって科学実験に我を忘れた折などに、

かつて味わったあの集中感が甦えってきて、自ら非常な満足を覚えることがある。私の生涯を通じて、あの時代に味わったあの集中感が、集中感の尺度となってはたらいているかのようである。

○

雨の日に押入れにむごりこみ、布団でつくった小部屋の心よい感覚。父のかんしゃくを母に抱かれて受け止められた折の安心感の記憶は、時によって心の中におだやかさを求めるよすがとなって生きてくる。しかし、また、町を独りで歩いている時、突然に現われた年長らしい子どもが、理由もなく私の頭をなぐりつけた時、私はここではじめて、いかにも不可解な敵意というものの存在を発見することができたが、この記憶が敵意について考えさしてくれる良い材料になっている。

これとは反対に、敵意なるものが私の心の中に忍びこんで、そのためにひどく悶えた記憶もある。われわれの家の近くに広場があって、そこが良い遊び場になっていた。ところが、広場に接したある家の庭に一匹の犬がいて、絶えずわれわれに向かって吠えることを止めなかった。友人がひそかに私にささやいて犬の殺戮計画をうちあけた。彼の考えによると、饅頭に針を入れておけばそれを食べた犬は容易に死ぬにちがいないと言う。早速小使銭を出して針入り饅頭を仕掛けたものの、この謀略が完全に成功するものと信じていたために、次の朝、犬の声を聞くまでの間、気を痛め通したことを憶えている。

道ばたで拾った針金が、突然手の中で動きはじめて、それが虫（ハリガネムシ）であることを見出したときの驚喜は今でもよく記憶している。この時に受けた未知の世界に対する発見の感激は、その後の長い生涯の間においてすら類がないと言ってもよい。恐らくこのような感激が私をして科学を志しめた遠い動機となったにちがいない。しかし、また一方、私の側で寝ていた母が、ある朝、近くのお宮の森で鳴くカラスを聞いて、母の姉の病が重くなったのではないかと憂えるのを聞いて、気味の悪い話だと感じたのを知っている。長ずるにつれて、そのような事の真実である道理がないことは了解はしたものの、この記憶は時に甦えって、逆に科学にも限界があることを思い起こさせてくれる。

○

思い出を通して見るこども心は、いたって鮮明である。鮮明なだけに懐しさも深い。そして、その一つ一つが生涯の生活や物の見方に、単に密接な関係をもったという以上に、むしろそれらの根源を与えているかのように思えてならない。生涯のどの時にかつてあのようにおだやかであったであろうか。また、未知の世界の発見にあのように純粋な喜びを味わったであろうか。そして、またかつてあれ程正直な自己訓練に終始した日があったであろうか。そのようなことを考えてみると、一生涯というものは、あのような根源をもとにして、その上に組立てていった櫓にすぎないのではないかと疑ったりする。

（お茶の水女子大学学長）